

しらうおや灯の入る前の店に酌む 山田真砂年
まばらなる菜の花貧乏くさき花

俳壇 五月号

大分前のことになるが神田の藪蕎麦で杉浦日向子さんが一人、蕎麦を肴に日本酒を傾けているのを見た。かつこいいの一言。一度はあんな鳳な飲み方が出来たらと思つた。酒を飲めない私の夢である。

この旬、何とも羨ましい情景である。日暮には少し間があり灯は点すまでもない。そんな店で一人しらうおを肴に酒を酌む。男性ならば誰もが憧れる飲み方ではないだろうか。

しかし、こんな飲み方が一朝一夕に出来る筈もなく今まで幾度も通つて粹できれいな飲み方の出来る客として認められて初めて「今日はいいい白魚が入ったから」と声がかかる。薄暮のぼんやりした明るさの中に白魚の自が美しく見える。

店の場所はどの辺りか、役者は誰が似合うかなどと読み手が勝手に楽しむことを許してくれそんな気がするのだが。

山村暮鳥の「純銀もぎいく」は「いちめんのなのはな」のフレーズを繰り返し私達を菜の花の中に誘い込むような詩である。詩や俳句には日で感じるもの耳で感じるものがあると教えられた詩であつた。

菜の花は広い景で詠まれることが多い。菜の花の黄色は派手な色ではないので一面に広がっている時も一・二本手に取つた時も優しい色である。このように詠まれた旬に出合つたのは初めてだが妙に納得させられた。田畑、畦、土手に疎らに咲く菜の花は優しい黄色であるために貧乏くさく見えてしまうのかもしれない。